

体験的私学教育論

－若手私学教師が考える学校と教育－

飯牟禮 光里（現代教育研究所研究員 淑徳 SC 中等部・高等部）

粕谷 依里（私立中高一貫校 非常勤講師）

細井 瞳（千葉経済大学附属高等学校）

友野 清文（現代教育研究所所員 総合教育センター）

はじめに

本稿は昭和女子大学を 2013 年 3 月に卒業し、現在私立学校で教鞭を取っている 3 人と、教職課程の教員による私学教育論である。第 1 章から第 3 章の 3 人の文章は、若手教師としての体験を踏まえて、私学とそれを取り巻く状況、そして教師としての自らの生き方を考えようとしたものである。現場からの報告、そして私学教育への一つの提言となれば幸いである。

第 1 章 女性が教諭として働くために

1 私立学校で教えるということ～教師になるまでの道のり～

私立学校で学ぶメリットは何か。それは建学の精神に基づき、ひとりひとり丁寧に指導し、整った環境の中で学校生活を送ることだ。

自分の苦手且つ嫌いだった教科である英語科の教師になる予定ではなかった。教師になることは高校時代からの夢だった。私立高等学校に進み、そこで出会った先生方に大きく影響され、教師を目指すようになった。当時は社会科の教師を希望しており、地歴の勉強に励んだ。しかし、ふとしたとき自分の得意科目の教師になるのが一般的で、苦手科目の教師を目指している人はまわりには誰もいなかった。苦手な科目の教師になるのは人の倍、努力を要することは明らかで、易しい道とは思えない。そもそも得意科目の教師は本当に該当教科が苦手な理解に悩む生徒の気持ちがかかるのか、という素朴な疑問を抱いた。ならば自分と同じように苦しんできた科目の教師になり、上からの指導ではなく、横から寄り添う指導をしたいと考え、長年足を引っ張ってきた英語科の教師になる決意をした。

大学を卒業後、すぐに神奈川県私立共学高等学校に勤務することになった。私立と言えば建学の精神に則り、人との接し方の指導、厳しい校則、真剣な授業風景などを思い浮かべていた。ところが、それらの想像はすぐに消え去り、ただただ追われる日々の始まりであった。

1 年目は副担任で学年の仕事はほとんどなく、教材研究の時間よりも校務分掌に費やす時間がとても多かった。教材研究が十分に行える学校は数少ない。もちろん、生徒と関わる時間はあるが、あくまでも授業内や休み時間だ。放課後は会議か分掌の仕事、部活は始まりと終わりの時間に顔を出す程度である。副担任という立場で、学校行事の大まかな流れは 1 年を通して理解できたものの、学年への付き添いやサポートの仕事はほとんどなかった。2 年目になり、高校 2 年生の担任を受け持った。クラスの生徒は運動部加入率が高く、授業は貴重な休息時間であり、部活のために登校しているようなものだった。やんちゃな子も多く、私に対して「死ね」のような暴言が日々飛び交っており、頭髪・服装の校則違反、教科担当からのクレームも日常茶飯事で、我がクラスの評定平均

は学年ビリであった。まさに「精神強化のトレーニング」をクラスで行っている気分だった。学年の教員は自分のクラスを受け持つことが精一杯で、すれ違う廊下で「大変ね」という決まり文句の会話をするのが一般的だった。2年間でその高等学校を退職し、3年目からは東京都の私立女子中高一貫校に勤務することになった。私自身が女子校出身ということもあり、女性の育成に努めたかったのが一番の理由だ。教科指導に加えて、品格や振る舞いなど女性としての生き方を伝えることができるのも女子校という環境が必要であった。

共学校から女子校へ異動して最初に感じたことは、女子校はこんなにも学校を清潔に保つことができるのかということだ。男子が不潔というわけではないが、女子と比べて運動部加入率が高く、校庭の泥の持ち込みも多いため、学校が汚れやすいのだ。その点では女子の方が美化への意識は高い。また、私たち教員の言葉づかいへの配慮も欠かせない。私自身が女性ということもあり、常に生徒の手本となる言動・行動をしなければならない。日常生活における過ごし方、生徒への話し方・指示への意識が高くなり、また女性としての品格を持つ大切さに気付いた。

2 生徒指導において大切なこと～教師・生徒ともに「守る、守られる」ために～

教員生活3年目という大変短い期間に習得したことは極めて少ないものであり、ほとんどが感情的なものだ。もちろん生徒は勉学に励み、向上心を育み、さまざまな成果を発揮させるアシストをするのは教師の役目であるが、ここでは学習指導ではなく生徒をサポートする教員態勢の在り方に焦点をあてたい。以下の項目が生徒指導にあたって、求められる教師像である。

- 1 学年の生徒に問題が起きた場合には、担任が一人で対応するのではなく、学年主任または他の学年の教員と共に対応する。当該生徒が女子生徒の場合、担任が男性であるなら女性教員が付き添うようにする。
- 2 生徒に個室で話を聞く際は教員二名以上で対応する。
- 3 学年の担任団の連携を強化する。特にクラス数が多い学校の場合は学年主任だけでは対応しきれない部分があるので、数クラスを束ねるリーダーがいることが望ましい。

項目1では、個別で指導する際、当該生徒が女子生徒だった場合、男性教員には打ち明けにくいことがある。特に身体的な問題に関することでは生徒への配慮を十分なものにしたい。少ない人員で校務運営をしている私学が多くあることは重々承知しているが、そこには惜しまず人員を動員してほしい。ここで大切なことは担任が主に指導することになるが、大前提なのは学年の教員で指導をしていくという心構えである。特に初めて担任を受け持つ新任教諭には生徒指導に慣れておらず、ささいなことでも抱え込みやすくなるため、周りからのサポートが必要不可欠である。私はこのサポートの重要性を強調したい。

項目2では、「言った・言わない」を明確にするため、第三者を含むことで問題を客観的に判断する人物を交えると円滑に解決できる。また、項目1のように一人で対応するのを避けることができる。教師2人に対して生徒1人というのは、生徒が圧倒されてしまうのではないかという意見も

あるが、個人で対応するよりも教員同士が力を合わせて対応することが大切なのである。

項目3では、生徒に何かしらの問題が起こったとき、最終的に対応するのは担任である。問題の大きさにもよるが、たった一人で担任が対応するのは精神的に負担であり、生徒も教師も共に改善の方向に向かうのに時間がかかる。

高校2年生の女子生徒Aさんがクラスの友人関係で問題を起こしたとしよう。もちろん、最初は担任が中心となって動くことになるが、その際に学年の教員と一緒に話を聞くときに立ち会うと良い。もし学年の教員が立ち会えない場合は、部活動や授業で接点がある教員でも構わない。今後どのように対応していくかも担任が一人で考えるのではなく、学年で考えていくことだ。学年主任には報告のみという場合もあるが、主任に報告するときも立ち会った教員たちが共に報告するのが最善のかたちである。学年でのサポートは自分のクラスのサポートにつながるだけでなく、教師自身の精神面の支えにもなるのだ。若手だからそれは甘えているという意見もある。教師はいちいち立ち会うほど暇でない。確かにそうかもしれない。しかし、共に働く仲間を助け、支え合うことは今現在抱えている仕事以上に大切なことなのではないかと私は思うのだ。

3 生徒指導以外の教師の仕事

校務分掌は教師という仕事の中でパーセンテージを大きく占めるものだ。教材研究が十分にできない理由は、校務分掌の仕事量が多いからという言葉も現場の教師からよく聞く言葉だ。負担は大きい、学校を運営していくための術や体制、年間行事の進め方などをこの分掌を通して理解していく。校務分掌は、教師としての経験を高めるだけではなく、学校をどのように繁栄させていくか、運営していくか、生徒にとって過ごしやすく且つ安全に楽しく学校生活を送ることができるかを考える、組織の1人であると自覚できる仕事なのだ。主観的な指導法から客観的な指導法を習得できる、あるいは発見できる機会が校務分掌にあると言っても過言ではない。

校務分掌や学校行事などで目立つものと言えば、個々の教員の人間性である。特に文化祭、体育祭、そして卒業式等の大きな学校行事は、日頃接触している教員に加えてあまり話さない教員とも関わるため、新たな発見がある一方、見えないところが見えてくる。これは良いことも悪いことも両方含んでいることから、「教師の指導力向上」ではなく、いかに大人として職場の人間と上手く接していけばよいかという「適応力」の向上につながると私は信じている。

4 女性教員が長く働き続ける職場であるために

女性が教員として長く働き続けるために、出産や育児にともなう特別休暇制度を学校側は整える必要がある。私立学校の中で教員の男女の割合はそれぞれだが、極端に割合が偏っていたり、女子校なのに女性教員が少なかったりという現場もある。その原因は教員を採用する人事部（委員）だけでなく、女性教員が長く勤務できる形態が整っているかどうかにも大きく影響する。妊娠したら、肩を叩かれてしまうという現場もあるようだ。多くの学校の場合、専任教諭の雇用形態では産休・育休の取得する権利がある。常勤教諭、常勤講師、非常勤講師の身分では取得する権利が得るのはなかなか難しいのが現実だ。取得が難しい場合は退職をし、出産や育児の目途がたってから再び現場復帰するのが一般的だが、その際に専任の身分に戻ることができる可能性は低い。教科指導に喜びややりがいを感じるのであれば、仕事復帰後の身分は講師でもいいだろう。しかし、生活指導、

進路指導、日常の学校生活における問題を抱えた生徒とゆっくり長い時間かけて接していくことを望むならば、「教諭」でいることが必要だ。教科指導だけでなく、部活や放課後の生徒指導が生徒との信頼関係を築く場所であると考えているため。私は少しでも長く「教諭」でありたいと思うのだ。

特別休暇を取得するために権利として訴えるのではなく、学校に貢献していく覚悟が必要だ。学校側からも必要な人材であることを認識してもらい、生徒とともに成長することを意識しなければならない。

公立、私立問わずに多くの女性教員が家庭と仕事を両立できる環境づくりを目指し、現代に見られる「働くお母さん」の姿を生徒に示すことは、生き方の一つの手本になると私は確信している。

(飯牟禮光里)

第2章 私の教員生活

1 教師を志望した動機

私が教師になりたいと最初に思ったのは小学生の時だった。学校が大好きで、担任の先生がいつも楽しそうに仕事をしているのが印象的だった。ただ、その頃はまだ漠然としていて具体的に小・中・高のどこに勤めたいなど考えてはいなかった。教壇に立つには板書の字はきれいな方が見やすいと思い、書道を母に習いたいと言ったのを覚えている。他にも、ピアノ、水泳、英語、剣道、バスケットボール、算盤、クラリネットなど色々な習い事をしてきたため、「人に教える」教師の仕事ならばこれらの経験が無駄にならずに何らかの形で活かせるのではないかと感じた。

中高の教員になると意志が固まったのは、中学生から高校生にかけてだった。中学生の時に家族で北京にある故宫博物院に行ったのを機に、中国の文学や文化に惹かれた。高校生になり「源氏物語」の作品を通して、当時の慣習が今と大きく異なることに衝撃を受けた。ここから、古文や漢文の世界に興味を湧き、大学でより専門的な知識を増やして深めていきたいと考え、本格的に目指し始めた。

2 現在の立場に至った経緯

私は学生時代に4年間塾講師のアルバイトをしていた。自分が初めて指導する立場になって、授業準備など表には見えない仕事がたくさんあることを知った。しかし、生徒が合格を報告しに来る姿を見る度に嬉しさとやりがいを感じた。ますます「教員になりたい。学校で働きたい。」という気持ちが強くなった。

大学卒業後、私立学校の中高一貫校に勤めた。今年で3年目に突入するが、まだまだ教員としては2年半を過ぎたばかりで日々生徒と共に学んでいる。今までを振り返った中で学んだことや今後の課題などを述べていきたい。

3 私立学校で働く教師

自分は公立中学校、県立高校、私立大学と通った。学校にはそれぞれ教育目標があり、掲げる生徒像やそれを育成するための理想の教員像があるだろう。私立学校に勤める教員ならば、必ず自分の学校の目指すものを把握していなければならない。そして、受験を考えている保護者や生徒に対し説明できるように、普段から心掛けて邁進する必要がある。具体的に言うと、学校は生徒に対して力を入れていることは何か、入学すればどのような力が身につくかということを教員が自信をもって言える

ようにしておくことだ。

4 教師としての仕事と取組み

実際自分が大学を卒業してすぐに働くと、教師の仕事といっても実に様々だ。1年目は教材の研究を含めた授業準備に毎日追われた。それと並行して、校外学習、体育祭や文化祭などの学校行事、分掌の仕事、学年の仕事、入試業務も行わなくてはならなかった。これらを日々限られた時間の中で、どのように順位を優先してクリアしていくかが本当に苦労した。3月までは学生という立場で授業を受けていた身が、4月に入って立場が「先生」と逆になった。生徒からしてみれば学校にいるのは全て「先生」であり、1年目など関係なくベテラン同様に授業の質を求められた。横並びで持っている科目にあたっては相当なプレッシャーだった。自分の担当していた授業の多くは、単独ではなくて他の教員と一緒に持っていた。したがって、自分の担当している生徒の知識が不足して考査で不利が生じないように授業第一で仕事をした。指導教諭の授業を週に3回、教室の後ろで見学した。そこで授業の雰囲気作りや生徒との距離間、発問例を学んだ。他にも研修の一つとして、年に研究授業を5回ほど(教科3回、LHR2回)行った。後の検討会で、授業を見に来て下さった先生たちから助言を戴き、それを基に次回からの授業改善に努めた。私は発問と板書が課題だったことから、授業を見学しに行くことや空き教室での板書の練習は欠かせなかった。

授業以外で一番心配した事は生徒との関わり方だった。授業が集団の中で生徒一人ひとりの性格を知るは無理だと思い、「給食、休み時間、放課後」積極的に生徒に声を掛けた。また普段から「報告・連絡・相談」を大事であると考え、些細な気づきも学年主任に伝えた。するとそれをきっかけに、生徒についてのことも教えていただいた。生徒のことが少しずつ分かると、授業も緊張しなくなり学校行事も一緒に楽しめるようになった。生徒との関係を築くのも多くの時間がかかるが決して無駄ではなく、むしろ大切な時間である。

5 教師の人間関係(生徒、同僚、保護者、地域、その他)

今までのことを振り返ると、教師の人間関係とは学校内外を問わず、お互い支え助け合いの中でできることが多い。例えば、「どうして、今日の授業に集中できなかったのか。」と感じたことも、後に担任の先生に報告すると、「ありがとう。今日、会っていなかったから、心配してたよ。それとなく本人に声をかけてみるね。」とお礼を言われたこともあった。思うに、生徒もその時々感情の浮き沈みがあるため、こちら側に出しているサインは、そこに居合わせた教員が気づき、チームとして生徒を支えるという認識が重要だ。

また、同期のありがたさを改めて感じた。ベテランの先生には中々相談しにくいことも、同じ立場の同期ならできたり、意外と同じ悩みを抱えていたりして話し合うことで解決が早かったこともあった。やはり、一人で抱え込んではいけない。2年目以降になって気づいたことは保護者の協力、信頼を早い段階で得た方がいいということだ。1年目は、あまり余裕もなく保護者と教科担当者では接することも少ない上に、正直どうしたらよいか分からなかった。しかし、生徒のことで、手をかけていると、解決の糸口が「家庭」にあることが多く存在する。その場合は担任に相談する際、家庭環境はどうであるか。保護者が子どもに求めることや学校での状況をどこまで把握しているかを確認するだけでも、解決策を出せた。そして、場合によっては面談をしてもらい、学校と家庭が密な関係とな

るのがよいと思った。

さらに地域の方とも、受験生は近隣の中学校や小学校から進学してくることが多いので、地元との交流は大事である。これは公立、私立に関係なく、学校という場では地域の人々の助けがあって成り立つものであるから、疎遠になってはいけないし、思いやる気持ちが大切だということである。

6 教師の理想と現実、教育と学校について考える

ここで振り返ると、働く前と今での「教師像」は異なる。学生の時、専門科目や教職教養などの勉強をして教員になることが一番の目標だった。だからこそ、正直なまでの現実、理想との埋め合わせは簡単ではなかった。しかし、大学の先輩たちから、働いてからの困難や現場の話を伺っていたため、少しは覚悟できていた。

実際に働き、学校現場に入ると今度は明確な目標ができてくる。授業ではこの先生の指導の仕方、中学生との関わり方ではこの先生、(中1では…、中3では…)と日頃周囲を観察することで、より具体的な教師像というのが見えてきた。振り返ってみると、大切なのは、上手くいかないときもまずは現実を受け入れることだ。後にどう対処するかと時間をかけて考えるのが重要だ。生徒も人間であるから、気分がのらない時や部活で疲れていることもある。例えば、お昼直後の授業はスタートの切り替えが大変だ。そのような場合、「準備しなさい」などyouメッセージよりもIメッセージで伝えるようにする。生徒の心を動かすことができるようにこちら側から声掛けを日頃鍛える必要がある。どんな時も感情的にならず、一方的に叱らないよう心掛けている。

7 これからのどのような教師になりたいか(目指す教師像)

これからの時代、「ICT」の活用を前向きに考える必要があると思う。時代の情報化が進んでいくにつれ、教育界だけが取り残されてはいけない。むしろ、便利な社会を効率よく活用していく必要があるのではないかとさえも感じる。普段の授業で、古文・漢文に関しては本文を板書しているが、正直時間もかかるし、いい方法がないのかと毎度思う。無理やり、電子黒板などを使わないといけないうという考えではなく、時間の省略にもなり、生徒の興味も惹きつけられる上で活用方法はないかということだ。タブレットの使い方によっては、生徒自身で考える力を養わせ、教師主体を生徒主体の授業にシフトすることも可能であると考え。授業力向上のため、生徒の主体性を伸ばすにはという点で取り入れていきたい。

(粕谷依里)

第3章 私学が繋ぐもの

1 私学教員への道

現在、私は生徒を前に、国語科の教員として授業を行い、一年生の担任として生徒と日々雑談をしたり、叱ったり、時にクラス一丸となって行事に取り組むこともある。ただ、これは昔の自分からは想像も出来ないことだった。教員になった当初は夢心地だった。このような私が教員になったのはなぜか。それは、先生方との出会いだった。そして、生徒と様々な角度から関わっているのもやはり、中学、高校時代の経験や出会いが影響している。現在、千葉県私立高校の国語科の教師として教壇に立っている。思い起こせば、中学、高校、大学と私立に通っていた。まさかここまで私学と長く付き合うことになるとは思ってもみなかった。幼い頃から、常に身近な存在で目標でもあり、憧れでも

あり、時に叱られていらつきをぶつけてしまう対象でもあったのが教師である。教師のふとした言葉に気付かされ、頭の中でループするその言葉を飲み込み、次の一步を踏み出す。気付けば、そのような行動を繰り返していたように思う。その繰り返しの中で大きな転機は高校での先生方との出会いである。一人は担任の先生だった。成績が思うように伸びず、部活動も思いのほか厳しく、どちらにも悩みを抱えていたときに先生は何気なく私を呼び、ゆっくりと様々な話をしてくれた。就職活動をする中で進学に特化した高校を選ぶか、文武両道を目指す高校を選ぶかで迷った時に、ふと特別支援学校で出会ったダウン症児の笑顔が過ったそうである。無邪気に無心で生きるその姿を思い出し、子ども達の学びたいという心や日常で感じる様々な感情と向き合える学校を選ぼうと思ったそうである。すぐに教師を目指そうとは思わなかったが、そのとき教育という言葉が身近に感じられ興味が沸いた。もう一人は中学校から、授業を担当していた書道教諭との出会いである。それまで、私はお手本に忠実に書くことに躍起になり、上手いかなと誰にも見られないようにすぐに丸めて捨てていた。しかし、その書道教諭はお手本通りに書くことが出来るようになったら、そこに自分なりの解釈を加えてよいのだ、と教えてくれる。その言葉によって、今まで凝り固まって頭や心がほぐれるような感覚を感じ、書道を学ぶ楽しさを感じることが出来るようになった。その書道教諭は後に私を今勤めている学校に紹介してくれるのである。今、生徒に授業を行うときに、そのときの気持ちを思い出すことがある。

仕事や生き方で悩んだとき、道標のような揺るがないものからは、大きな安心感を得ることが出来る。社会の波に飲み込まれそうになった時、そこには、一人の人間を認識してくれる先生方がいる。揺らぐことのない方針を掲げた学校がある、それは長い人生を歩む上で、微力ではあっても大切なことであると思う。私の場合は、偶然、直接的な繋がりが今の教師となるきっかけになったのだが、直接的な繋がりはなくとも確かな根幹を持つ場所の卒業生というだけで、心強いのではないだろうか。

2 私学を取り巻く環境

では、今度はその私学で「教える」という立場にたった今、私は何を考えるべきなのだろうか。私自身、まだまだ教師というにはあまりにも未熟だが、改めて教師という仕事を振り返り、考えたいと思う。特に、私自身をこの職に就くきっかけにもなった、私立の「繋がり」について幾つかの視点から考えてみたい。

私学の「繋がり」に私はまず驚かされた。かつてお世話になった書道教諭の一言で、教師への道が始まったことは想定外だった。

専任の教員となった昨年、さらに強く私学の「繋がり」を実感することになった。かつて部活動を見てくれた顧問の先生方と大会で再開した。最初は、自分が生徒であった時のことを思い出し、複雑な気持ちになったがその後は何かと私のことを気にかけてくださった。先生方に私を紹介してくれたのである。それ以降、その先生の教え子ならということで、練習試合や研修に誘って頂ける機会が増えた。関わった先生方は公私も年齢も問わなかった。時には部活動の悩みに限らず、学級経営や教材研究のことまで多くの悩みを共有出来ることもある。

ところで、私立と言えば、文部科学省が掲げるように独自の視点で、教育を切り拓くことである。これは、私立の強みでもある。

しかし、ここには問題点もある。私立の長い歴史を意識するあまり、改革に対して、臆病になるこ

とである。また、長年仕事を共にしてきた、教員同士の人間関係がかえって柵となり、思うように身動きできなくなるのである。これは外部との関わり方も同様である。専任となり公立の先生方との交流が増えるにつれ、私立の活動範囲の狭さを実感した。また、これは他の私立学校かから来た教員の話だが、私立学校の楫を取る人物と相性が悪かった場合。校長や理事長のワンマン的な経営や教育方針が示され、教員たちを一色に染めようとしたり、単純にクラスごとの成績で教員の力量を判断したりするような、極端な行動に走ってしまう。私立学校は、一筋の目標を掲げながらも、時代に臨機応変に対応する必要がある。古い歴史を大事にするのと、普遍的な目標を掲げて時代にあった教育を行うのとでは、大きく異なる。そこで、重要となってくるのは、私たち若手教員の意識である。私の場合、頭で勤め先の教育目標や校訓を理解しても、身を持って実感したのは3年目の今である。さまざまな角度から、生徒や教員を見つめ、接していくうちによりやく実感できた。授業はどのように受けるのだろうか、学校行事の生徒の取り組み方はどうか、教員の生徒や保護者の要望の答え方、教員同士の人間関係、これらのことと日常的に直面することで、確認できるようになった。ここから、時代と生徒、教員を見つめ、新しい風を吹き込んでいかなければならないと考える。

3 私学での取り組み

先日、研究授業が行われた。今年度からの試みである、『論語』の研究授業である。二つのクラスの中で、それぞれの担任の先生方が教鞭を取った。一つは特進クラスで社会科の教員が担当し、講義形式の授業だった。人数が40人と多いため、大会議室を使用した。孔子の生きた時代の説明から入り、いくつかの章句に触れながら、現代の私たちの生活にどのような関わりがあるかを生徒と一緒に考えるようなものだった。もう一つのクラスは商業コースの35人学級で、クラス担任を初めて持つ25歳の教員が担当した。こちらは、クラス内の生徒の交流を目標とした、グループワークを用いての授業だった。

実際に私学に勤めるまで、長年続く私学が学校の方針を受け継ぐのは簡単なことのように思っていたが、社会が変れば、生徒も変わり、教師陣の構成も性質も変化する。研究授業後の意見交換の場で、60代の教員が過去に行っていたHRの様子を語った。過去には、HRで生徒にグループを作らせ、グループごとに考え、発言するというのは当たり前のようにやっていた。仲間の教員の多くがそのような取り組みを行っていたと。25歳の教員の取り組みを見て懐かしさを感じると共に現代の子どもたちのニーズにも合っているのではないだろうか、と改めて新旧の教育を見直し、現代に活かすことの重要性を感じたそうである。中々クラス内で人間関係を構築できない生徒にとって、仲間と楽しい会話をしながら行うグループ学習は、必要なことである。ここ1年～3年で長年同じ学校に勤めた団塊の世代が退職する。引き継ぐことと、私達がそれを現代に体現することを考えていかななくてはならない。

4 これからの私学のあり方

そこで立ち返らなくてはならないのは、やはり、クラス経営と授業である。当たり前のことだが、日々の業務や部活に追われる毎日を送る新人教師にとっては、なかなか難しい。一日、授業や授業準備に追われ、空き時間が出来たと思ったら、生徒の指導を行わなければならない時もある。放課後は部活動の監督を行い、教材研究を19時頃から始める。しかし、放課後の時間、ふと職員室を見渡すとこのような光景が見られることがしばしばある。就職が決まった人、就職先の研修の愚痴を言う人、

結婚報告、父親が亡くなり悲しみや自責の念を吐露する人、放課後何人かの先生が電話越しにあるいは直接会って様々な局面を迎えた卒業生と話をするのである。時には、現在通う生徒から、卒業した姉兄の話を聴くこともある。また、保険会社の勧誘かと思えば、何十年も前に卒業した生徒が母親となって、生徒の相談をしていることもある。この繋がりや、私立独特のものではないだろうか。訪れる人の中には、アポイントメントを取らない場合もある。それも、ふと思い出した時に教わった先生が職員室の中にいることを容易に思い浮かべられるからだろう。もう一つの「家庭」のような空間がそこに広がる。

このような空間を守り、時代に合った教育を日々考えながら、受け継がれることを恐れずに現在の学校がどのような立場に置かれているかを見極め、挑戦していきたいと思う。

(細井瞳)

第4章 私学と私学教師のあり方

ここまでの3人の記述を受け、若手教師の課題とこれからへの期待を整理したい。

1 教師という存在 —最近の二つの流行語から—

最近の教育界での流行語の一つに「チーム学校」という言葉がある。

きっかけは2013年に実施されたOECD国際教員指導環境調査(TALIS: Teaching and Learning International Survey)の結果であった。2014年6月に公表された調査結果で、日本の教員(中学校段階)の1週間当たりの勤務時間が参加国最長(53.9時間)、参加34カ国の平均は38.3時間)であり、その主な理由が「課外活動指導」と「事務作業」であることが明らかになった。あるいは、日本の学校では教員以外の専門スタッフの割合が低いことも指摘された。

これを受ける形で、下村文部科学大臣が7月29日、中央教育審議会に対して、「これからの学校教育を担う教職員やチームとしての学校の在り方について」の諮問を行った。それ以来「チーム(としての)学校」という言葉が行政で多用されるようになったのである。

この諮問に対しては中教審の初等中等教育分科会・チームとしての学校・教職員の在り方に関する作業部会が「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について(中間まとめ)」を2015年7月にまとめた。

ここでは、学校に教員以外の専門職(スクールカウンセラー[SC]やスクールソーシャルワーカー[SSW])や「部活動支援員」や「地域連携担当教職員」などを置いたり、地域の人材を活用したりすることで、教員が本来の教育活動に力を注ぐことができることが提言されている。^{*1}

もっとも財務省は教職員定数自体の削減を主張しており、^{*2}実現には困難が予想される。ただ中朝的方向としては、学校現場に教員以外の人に参加していくことになると思われる。専門職であるSCやSSWに加え、学校評議員・学校運営協議会・学校支援地域本部³は、各々の立場で学校の運営に

1*ここでは明記されていないが、業務の民間委託も進められている。学校給食に加え、学校図書館の運営の委託も一部で始められている。

2*例えば2015年6月の財務省財政制度等審議会の「財政健全化計画等に関する建議」では、今後10年間で義務教育教職員定数を4万人余り削減することが主張された。

3*現在「学校支援地域本部」を「地域学校協働本部」(仮称)に改組し、コーディネート機能を強化し、継続的な支援が行えるようにすることが議論されている。

関わっており、土曜日や放課後の事業（名称は自治体によって様々である）には地域のボランティアの参加が見られる。これらは主に公立の小中学校で進められているが、高等学校や私立学校も、このような動向と無縁ではない。

もう一つ、現在の教育界での流行語は「アクティブ・ラーニング」である。次期学習指導要領（2020年度から実施予定）のキーワードとして語られている。これ自体は100年以上前からデューイや「新教育運動」が実践してきたことであるが、教師が「何を教えるか」と同時に、生徒が「どのように学ぶのか」「何ができるようになるのか」という点を含めて学習指導要領が記述されることになることが予想される。

以上のような動向の中で、改めて教師の役割と資質が問われることになる。「ファシリテーターとしての教師」が言われて久しく、「From Sage on the Stage to Guide on the Side」（壇上の賢人から寄り添う案内人）という表現も目にする。^{4*}

新しい教師の役割を担うには、従来からの教科の専門性や子ども理解に加え、多様な集団の中で動くことのできる力、そしてICT活用能力が必要である。文科省のある審議官は「ICTは50歳代以上には無理である」と明言している。いつの時代でもそうであるように、若い人たちに期待したい。

2 私学とは何か

ところで改めて私学とは何であろうか。これを論じる時にしばしば言及されるのが、私立学校法（1949年）第一条の「この法律は、私立学校の特性にかんがみ、その自主性を重んじ、公共性を高めることによって、私立学校の健全な発達を図ることを目的とする。」である。

つまり私学には、独自の教育を行う「自主性」と、塾などとは区別される公教育の一部としての「公共性」という二面を持つということである。しかしながらその具体的な内容については現在まで議論が続いている。

というよりも、私学教育についての研究は、個別学校についてのものを除けば殆ど存在しないというのが実情である。その中でまとまった議論をしているのが市川昭午（1930年ー）である。

市川は「私立学校の特質と課題」^{5*}において、「私立学校論の意義」を「現行学校教育制度の抜本的改革と再編成の原理を見出し、多様な弾力的な学校教育機会を保障する具体的な公共政策を工夫していく示唆を提供する」ものとしている。

その上で私立学校の「教育上の特質」として「自主性」「私学需要」「宗教教育・実験教育等の（公立と質的）異なる教育」そして「学力的優越等の差のある教育」を挙げている。この中で「自主性」は「私学固有の特性に基づき、独自の教育活動を展開できる」ことであり、「公立学校の教育サービスが十分供給されている中で認識できる」ものであると言われている。また「私学需要」では、私学が現実には公立の定員不足をカバーする「more education」となっているが、本質的には「better education」であるべきとされている。

さらに私学の公共性とは「国公立学校で充たし切れない教育サービスの選択を可能にする点」に認

4*この表現は Alison King が College Teaching (Vol. 41, No. 1 Winter 1993 年) に掲載した論文のタイトルである。

5*『教育学研究』（日本教育学会 45-2 1978 年）

められるべきであり、「独自性と多様性」こそ私学の教育上の特質であると述べている。^{6*}

ところで昨年安倍首相の私的諮問機関である「教育再生実行会議」がフリースクールや夜間学校の充実を提言したことを受け、「多様な学びの場」が政策的課題として急浮上してきた。そして2015年5月27日の「超党派フリースクール議員連盟」と「夜間中学校等義務教育拡充議員連盟」の合同総会で「義務教育の段階における普通教育の多様な機会の確保に関する法律案（仮称）」が承認された。ただこれは国会に上程されず、これを踏まえた「義務教育に相当する普通教育に関する多様な教育機会を確保するための法律案」が2016年の国会に提出される見込みとなっており、成立すれば2018年から新制度が開始の予定である。

これは、小中学校ではないフリースクールなどや家庭での教育を一定の条件の下で制度として認めることが目的であって、主に不登校や中学校未修了者を対象として構想されたものである。

同時に小泉内閣の構造改革政策の中で提案された「学校設置者の自由化」「教育内容の自由化」の流れを汲むものであるとも言える。「国公立学校」と「私立学校」という枠組みの中に、（少なくとも理論上は）塾などの私教育を含む「第三の教育の場」が制度化された時、「私立学校」は自らの立ち位置をどう考えるべきであろうか。

3 私学の教師に求められるもの

これまで教師と私立学校の現在の課題を見てきた。このような状況の中で私学の教師、特に若い教師には何が求められるのであろうか。

第一には公立学校教師に求められる資質能力のすべてが、私学の教師にも求められることは明らかである。文部省教育職員養成審議会「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（第一次答申）」（1997年）で提示された「教員に求められる資質能力」は現在でも文科省のHPに掲載されているが、「実践的指導力」としてまとめられる資質は、公私に関係なく必要とされる。

第二に、その上で私学の教師に求められるのは、保護者と生徒のニーズへの対応である。公立学校の教師（教育公務員）は「全体の奉仕者」であることが法令で明記されている。それに対して私立学校の場合は、保護者からの授業料などが学校経営を支えており、一義的には顧客である保護者と生徒へのサービスが必要である。ただそれは決して、彼らの明示的な要求を受け入れることではない。保護者は「顧客」であると同時に子どもの教育についての当事者（共同責任者）でもある。保護者とのパートナーシップの形成が公立学校以上に求められる。

第三には、粕谷さんが指摘しているように、学校の建学の精神・教育方針を自らが体現することである。採用の段階では偶然の要素が強いことは事実であるが、いったん学校の一員となつてからは、自校の教育理念や方針を理解し、それを実践することが必要である。そのためには、学校の歴史（特に創立時の経緯）を学ぶことや、卒業生から話を聞くことが有効である。

そして最後に、同僚や生徒との良好な関係を築くことである。もちろんこれはどの学校（職場）であっても共通であるが、定期異動のない私学では特に重要であろう。細井さんが触れているような二世以上にあつて学校に関わる家族も珍しくないのが私学である。もちろんこれは学校文化の問題

6*この論文は1978年のものであるが、市川は「私学の特性と助成政策」（国立大学財務・経営センター『大学財務経営研究 第1号』2004年）でも同趣旨を述べており、この時点まで市川の論点は基本的に変わっていないと言える。

でもあり個人的な努力だけでは限界があるが、若い立場から自分たちで文化を創り出すという意識を持つことも、あながち大げさではないであろう。

4 教師を取り巻くジェンダーの課題

最後になってしまったが、教師をめぐるジェンダーの課題は非常に大きな問題である。ジェンダーの課題は決して女性だけのものではない。むしろ「男性問題」の方が深刻かもしれない。（過労死・孤独死・自殺、ホームレスなどの家族・社会からの孤立は圧倒的に男性の問題である。）しかし本稿の共同執筆者にとっては、これから教師として働いて行く上で、女性としての課題を抱えていることも確かである。この点については飯牟禮さんが触れているので、補足的に述べておきたい。

「仕事と家庭」「子育てと仕事」についての議論をめぐってはほぼ「正解」が出ているのではないかと私は考えている。すなわち、ワーク・ライフ・バランスが実現するような働き方（長時間労働の禁止、短時間勤務などの働き方の多様化と雇用の安定性の確保、育児介護休業や育児時間の保障など）、性別役割分業体制の解体と意識の変化、社会全体で子育てを行う制度（公的保育の充実、家庭保育の支援、地域の人材育成など）である。

問題は「正解」が見えているにもかかわらず、それが実現できないことである。それどころか「育休切り」や「マタハラ」という言葉がメディアを賑わすのが現実である。

ここでは一般的な解決を示すことはできないが、ジェンダーの課題の捉え方についてまとめたい。これが共同執筆者へのエールとなれば幸いである。

第一には個人の選択権と価値観が最大限に尊重されるべきということである。つまり自分の人生は自分自身で決定できる、ということである。少子高齢化が進行する中で、次第に「結婚・出産圧力」が強まっている現在、結婚や出産・子育てはあくまでも個人の選択の自由の問題であると考えることが重要である。もちろん偶然や予期できないことは多いが、その時々で選択できることが重要であり、そのための力をつけておくことが必要である。

第二には、"The personal is political."という意識を持つことである。これは1960年代の女性解放運動で強調されたことであるが、職場であれ家庭であれ、個人的だと思う事柄（子どもを産み育てること、様々な人間関係を築くことなど）が実は政治的（社会的）なことであるという意識である。個別で抱える課題は実は多くの人に共通しているのであり、その原因や背景も社会全体のあり方と関わっていると知ることで、一人で抱え込まず、問題提起や連帯が可能になるのである。

第三には、第二の点と関わるが、何かおかしいと感じた時に声を挙げ、仲間を見つけることである。先に挙げた「マタハラ」も、妊娠による退職勧告や激務による流産という体験をした女性が、声を挙げて作った和製英語である。誤解を恐れずに言えば、言葉を作ることで問題は半分以上解決したと言える。（かつてベティ・フリーダン「名前のない問題」に名前を与えることで女性問題を提起した。）

「このようにして当然」「これが職場のやり方」「あなたのようなことを言う人はいない」と言われると萎縮してしまうが、自分の感性を信じて行動することが、社会の改善にもつながるのである。

第四には、これが最も重要で同時に難しいかもしれないが、内なる女性意識を相対化し、そこからできるだけ自由になろうと努力することである。

FacebookのCOOであるSheryl Sandbergは*Lean In: Women, Work, and the Will to Lead* (WH Allen 2013)

年)で、ジェンダーによる **ambition gap** を取り上げ、女性が自分で作り上げている「心のバリア」を打ち破って、仕事に対して意欲を持つことが必要だと述べた。かつて「成功不安」ということも言われたが、「女らしさ」の規範に女性自身が縛られていることが多いのである。⁷「女性だから家事をしなければならない(して当然)」「妻だから夫の面倒を見なければならない」「母親だから子育てができて当然」("perfect woman/wife/mother"の神話)という思い込みによって、仕事と家庭との両立が、物理的にだけでなく精神的にも困難になる。あるいは学校でも、女性教師としての期待を受け入れ、内面化することで、行動が制限されることもある。

もちろんジェンダーは人格の要素の一つであり、それを否定することはできず、その必要もない。しかし女性である前に個人である。職業人として、社会人として、そして家庭人としての役割をどのように組み合わせるのか、またどのような職業人・社会人・家庭人になるのかを決めるのも自分自身である。「女だから」という思いは、少なくとも現代の日本では、その選択肢を狭める方向で作用する。そのことに自覚的であって欲しいと考えている。

(友野清文)

⁷*これに対して、元プリンストン大学教授であり、米国国務省政策企画本部長を務めた Anne-Marie Slaughter は *Unfinished Business* (Random House 2015年)で、このような問題は「女性の問題」ではなく、社会や職場(そして男性)の問題であると主張した。筆者もこの立場に同意するが、ここではあえて Sandberg の見解を紹介した。